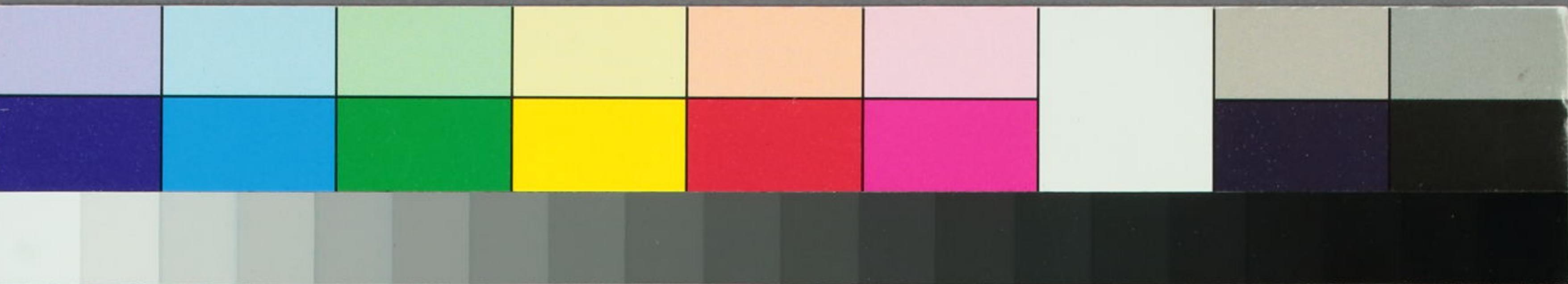


6 7 8 9 170 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2 3 4 5 6 7 8 9 190 1 2 3



芭蕉翁文集

俳諧袖珍抄

文泉齋

俳諧袖珍序

芭蕉翁以猶藩之陪隸。赫然名著都會。一時名人皆服為弟子。至今百有餘年。信奉之者益衆。像之碑之。香火之遍於海內。豈徒悅其詞華哉。又自有所慕也。翁為人真摯。年裁逾弱冠。遭其主之大故。痛悼不聊生。遂至剃染出家。鞋襪飄然。從閑雲野鶴。以畢其生。今觀其遺詞語。雖俳諧意則高遠。與西行之和歌並澤之詩相伯仲矣。是非其詞之似也。其人之肖也。余之先人如山居士。伊賀柘植之產也。與翁同村閭。親挹其遺風。意甚欽慕焉。性

雖不喜俳歌。至翁之作。時拈出之。誦賞不已。雖然。翁之名在天下。復何湏吾父子之稱揚耶。但我先人仁厚忠信。好學力行。有古人之風。而名不出於一藩。是罪在於不肖謙。得不力張之乎。平安默池生。尸祝於翁者也。類輯其遺篇。欲上之梓。以翁為我藩人。來索序於余。々既不得辭焉。且事闕先人。不勝風木之歎。遂併及之。

庚戌陽復月再生魄  
戲研學人齋參

金石學人齋藤詩識

おもひでや  
常つゆゑ  
一木舟  
小穴くぼてかめや  
もろき地じ  
りと行ゆ船ふね  
もあひうな  
こくし木きのす  
にあぬいを  
あらわす物もの一亦

捨てのわへば

往々あらん

こゝま紀神陰ま

なうと一そば

むす

せせ

ハ十二毛  
ねじ毛

序

深山乃も曠野の月丈れ  
のきぐとよておのへだ  
えくちうかすむしの  
ハおれとたとをあら  
今もかせてともあは  
まことてまつりめし  
こそ風雅れかきどといふ  
へりし我友古絶全比鷺泡  
小冊を編く袖珍抄と名  
づくあや想ひ翁一代の仰  
被の庵庵さるもれを採る

集りあつも一巻を一瞬より

渡し一物を神の内に納め

すあひて空ふ全蕉門の

格を知り月を比活動を悟

のあらえぐこも又おれ

乃ミうきよかの庵きかくと

むくゆにそくして狹小

本とあらじゆと云ふ

きくうすらとぞれとれか

あ水三年 洛  
初月の六 梅道識

凡例

一 祖翁一世の句五四事代  
選を冠せたるが故に代  
名を冠すものなりと/or  
題はよあくと號ともいふ  
ことある

一 奇仙一章を挿入し候と  
するが自らの筆仲齊橋を  
冠する所を記すを以てあく  
大概を終る

一 本集を率編と號する  
時代の文政を詳く書  
而も芭翁とあくも以  
て是も芭翁と號する事一  
あるされも芭翁の後芭翁  
と云ふ事無むねにま共  
ふ載す

一 不續五十頁と大正報  
文三五句七句の主を  
事ある歟

一之の秋乃ま袖才せき  
萬肆ニ乞ひとて上本す  
ふねハ漏洩しもくら  
波の男子よろしく補ひ  
玉ノタリと希

類題蕉翁發句集

春の部 目録

正月	元日	歲旦
立春	今朝春	花春
壬代春	君ヶ春	宿春
若夷	庭竈	松飾
鏡餅	齒朶	蓬萊
惠方	年玉	筆始
子日	凍解	永解
霞	陽峯	糸撻
暮逐	春風	春雨
若菜	芽	芳
土筆	若草	春草
野老堀	莖	梅
畠寺	海苔	獨活
柳	椿	春駒
猫ノ恵	白臭	獺祭糞
鶯	二月	

夏の部 目録

臘月 待花 初花 初櫻 水取 初午  
彼岸 温繁會 接穗 種前 春暮 寄貝風  
春雜 莓花 蕺子 雀子 烏巢 雜子  
董 藤 姝 峯 入 山櫻 桃 潮于 蝶 田螺  
花見 姥 櫻 八重櫻 太櫻 櫻 草餅 鳥巢  
行春 茶摘 花雲 花雪 櫻狩 系櫻 蝦子 生  
春暮 山吹 踏躅 蹤躅 蕺子 櫻子 蟹  
行春 割

栗實 摶花 合觀  
李桃 水鷁 水鳥巢  
暑 六月 水舞月 土用于  
汗 汗室 雲峯  
風薰 凉 清水  
心太 輩 道明寺 蓮  
昼貞 夕顏 水葱  
萍茂 午畠 真葉凡  
散榦 蟬 夏月  
秋近キ 夏雜

目錄終

類題蕉翁發句集卷一

古終舍默池輯

春の部

正月 正月も又はと遡はや閏月  
元日 え日やありハ湖ノ移の書  
えりハ因ノ母の口とを有り  
歲且 年へや接へるる様の面  
於ちく大考を乞ふ  
うすや影年うるる寒軍  
立春 はよそと九りのせふが  
龜馨 庭訓の往來従事多はせぬ  
嵐音ちづくる音小袖と

きみひ

維やうひふかうるるのと  
さの稚波とキミとゆゑ  
のあそ酒母へりうむる  
はせとおあがめのとく

つづく

花春 二りもやうやくれ花のと  
まうきくあくとくとく

季代  
春

伊勢より來る事もあらまほれむ  
君春 ひえもほくせりうどんをもる

宿春 細あくせきとおれも宿の春  
若夷 幸や人さうまそつもま夷

わう年と板(あけやま)あすす  
まことのわくとくとま

のむねのあくとど  
とれ

度電 敷魚と脂の豆や庵を  
庵よりて

松飾 いもれくろき葉のねどり  
鏡餅 餅祭のまゆあま餅の鏡が  
え乾鐵あり

齒朶 朶とまゆあま餅の餅の餅  
山あ連する

蓬萊 はなまきやのじのうち役  
蓬萊 はなまきやのじのうち役

惠方 惠方うらめやのじの牛の玉  
年玉 りそあつる年を年玉こう玉

はなまきの年を年玉と

ひなまきの年を年玉と

筆始 大津絵の筆の筆や行佛  
子日 子日ふねへゆんすもく那

ナセ西の庵

凍解 凍みて茶と假かねばが  
氷解 寒いあわやのうてひ脱つ矣

季代 紗透少景

霞 わかの経みや出その八景  
あまくと

ちあはやあもかれての和庵  
大里寺やへはまひ持一室

陽大 桜声すまかげの二子  
伊賀新大徳寺

丈大くはくとしのうの入

塔山旅宿

湯ゆえりわく肩か立旅夜が  
みろやまの旅夜が

せむ室の八時と  
糸継いとゆく法ひつなるりづか

へうるりむのとみの名跡が  
養達 まきはなは各ひらめく城と殿  
春風 そよ風やまかせるうておねえ  
あらじとゆく

ちうせや人おもうてこま

立する草納

春雨 立まやうのまかむとおもて  
立する草納

よしはれと庵

けふものや下よみのまかむ

もう雨やまとと神をやめ

おほく度とて

おねえやうれ起まむとおもて

ちあや葉吹く川柳

ちうめやねのまつよすの湯

おとあうこり室年り

二三事の往どりて

けふめや二京あまうるおもて

着葉 えんやあらひをまうるまうれ

蓑 ほろふうさまよもとくのとく

古細くざうあつとく男とも

一とせふ一夏のまうとがつねか

石川お銀せあ今まお家す

柳葉く麁んとおのをめ

草木深川とお葉る是木ま

浅場の芽すやあいとく

代のぼむまことかはまを

芳 我あらぬ浦のとくかうの含

むすみや墨子せの筆とまう

土筆 まふとむけ下とくらむく

圓角石と後とまく

そつ松山

野老堀 山寺のやまとまよとまう極

苦 ちと苦と多ある女機とまう

独活 まうとまうととおのとおうと

木やうや

畠あらみおまよありしう様と麻

海苔 美の先少たはだうらう藻のう

老塙

嫁よりみのりどく老のまゝ甚  
がどうのや山道と雪の山林  
山道を下りて

乃づけのまきひとまうは雲霧  
おの梅も生むると咲つて  
左の山のや難波の二重城

うちやあらわしきやまを下  
さうある梅もそりぬるが

竹園一枝到りて

きく自へ植れ一枝のことをさ  
あゝの山あたまに待つまふ  
よふよむじとまをまわる  
あこひみるもとまうは雲霧  
世植の梅もさうじともか

金舟とまほの雪降の梅  
そぞとすれじとまうは雲霧  
あさきとまほの梅の植地  
ほがえのあざと

猪鳥

傍山佐

うめやしきのや梅と雪也  
梅候てよろとまうは雲霧  
うめを植つまほと咲つて  
山里の山あ茶葉と梅の花  
あらね

月待や萬葉とけり小山伏  
山家

きくもまきひとまうは雲  
霧の山あふうじとまうは  
あうと雪うは雲霧とまうは  
石もあくびもまうは雲霧  
かくあさきをあうとまうは  
雪葉とまうは雲霧とまうは  
はまのまうは雲霧とまうは  
タマ

唐からふからみのくみのむ  
てせむのあま様様でんじ

君主に御の後承を以て  
侍ふにけむらのあくまく

ひととぞ我をもて拂ひた  
スもとこの處の中あるうみの花

みお彼のじろふ柳をどが  
御みおれどと西のうみのむ

御代民船うるみを進て  
柳のあぶねせうあやねの花に

里のすよあわのこそ牛の轍  
園女あ

暖きの奥みゆ北のうえ  
さもやけでなみの月と梅

人もそなみや従のうらの妻  
古事記のせ人のまあとど

きすとて

萬葉のうへ身もやし梅の花  
はくはくはまの二月ま

じと園あをふ父あ本  
のこがほりうる

あうふむじのいすあまきや

## 柳

梅うふの川と日の出る山野が  
うるせや日の松木のよたせり  
右川東風や面うそとれ柳聲  
絢音とよふかかへ柳うそ

在あまうそ

管と櫛と拂るう拂すあき  
様拂く對と

かのくのふ柳くまうそ  
右川うそとれすと拂柳が  
吹きく拂りふあき拂ふ

絃柱周

金乃馬が柳引ひる緋出る  
緋のよしる柳のああくうか  
とくとくとくとくとくとくと  
拂ふ拂ふとくとくとくとくと  
そくとくとくとくとくとくと  
くとくとくとくとくとくとく

八方ふすとあはすのたうか

傘く柳くまう柳く柳

三

卷之二

三

まふともねやたの筆ふん  
彦まふかくへうだけ  
近やほとひあすけの奥  
毛の毛もすりぬまの弱  
春駒  
猫忍  
絵を書く家の崩さうむ

因家

麦山一かやうすきあらう猪之  
祐也の多めいは開乃派自  
白鳥薦すすくらゆめとく内に  
あひのやうとあひてすすむ  
書は傳ひゆく事と考

時運ノ如ニ

セイ子後  
白魚やアモリ貝とあわせた網  
あらとふ後あらとこうら玉

頬繁奥象乃まつて未だ水田乃至

相如子雲

嘗  
掌ふ事ある行ひてあが  
うすやれじの歎のあ  
きや経よ塞よすら極きわせん  
雲雀くもとりとくづだぬひそか  
手やのよつねるを在

卷之三

卷之三

二月廿七日游洪山寺

勝利を獲る。左の者も右の者も、  
寄頭 見よる風姿をかわむる。庸  
名不ハ体のうち

幼午も八年水桶乃ちして天窓井  
被序事ひえまわら程と尋り合

溫榮  
會  
神話やもじもうけのゆゑと縁

## 二月堂

水取 水うちやうりは春の出でまつ  
待花 まつねやまつらうとうせん  
初花 あらはなうらはなせんかと  
はなよとおはなしゆめの物を

初搗 はつこすがわくわくたりあう  
吸きくら焼けやうくわくう  
新ふかぬお段わくよと初搗  
紅梅 ひなまやうくわくうふを薫  
接穗 うぶねくわくうに唐うら  
種芋 うぶねくわくうに唐うら  
笄花 うぶねくわくうに唐うら

ひなねくわくうに唐うら  
ひなねくわくうに唐うら

律生 律生うりうりや彼をあれ

延祐尚吉

萩葉 らの名を乞ふ新郎の妻  
茅下を乞ひと縁。

金の重慶

鶯 売りてはるひやどもくわ  
捕部 捕部

うりうりうりうりうりうり  
うりうりうりうりうりうり

雉子 雉子うりうりうりうりうり

高世

父母うらうらうらうらうら  
やまとせむ中の御子や能のう  
娘うらうらうらうらうらうら

通世の羽  
帰雁 やまとせむ中の御子や能のう  
雀子 やまとせむ中の御子や能のう  
津屋の信宗ははなり  
鶴とくとく

鳥巢 あす巣くあす巣く  
蛙 あすやううとむとむのう  
雄みの日 うとむとむのう

蝶 りむにれのれのれのれの蝶  
莊子重慶

怒狂の御事と云ふうる  
衆の御心もあらへまき

君やみやれや在るのまゝん  
りのみやれあまかどまゝ螺  
てみだれとくらみ車のりを

乍あらす

螺の羽は或ひもさう螺の羽  
起あくわまさんせんかくわ螺  
神よくらん内臣の管のままとあ

サホホとひき

波りやあらまと田螺が  
内祝ひか人れ天皇のまつうや

さるはねのそらあひやる

さるはねのそらあひやる  
あらはりはりはりはりはりは  
とおむきる人を儀て如歌

け入なまことほし娘妹

おる人をうき

まゆの不じうゑをせんづく

室二

雛

波りやあらまと田螺が  
内祝ひか人れ天皇のまつうや

さるはねのそらあひやる

さるはねのそらあひやる  
あらはりはりはりはりはりは  
とおむきる人を儀て如歌

け入なまことほし娘妹

おる人をうき

潮子 喜びの匂くちうく汝千子

萬葉と枕搖あり門人々  
三角嵐をあ

艸餅 あくまく枕とくすやすの徳

峯入 えゆのやつてかくすく小山伏  
伏見雲屏寺

桃 我夜小休乞所の草せよ

れの緑引て宿ひひりれに

ち白とほ無へて

より一秋りふ宿うる木櫻

古寺の枕く事すも男ば

舟すもすむむあら深の船

遙か人

桜 金のうちか居るさくさ  
探丸子別世

乾坤モ

よみとくすきとくすきと

あらはれりのとくすき

山家

窮ひ風か扇ひやのまへ  
あそてゆむうけやあさうす  
あのわくけむきも扇うか

平別せ

年もやまみとむとむの年座  
もひおハ扇くはては無う  
もうつね

山機 美履ひ風おとゆん山まう

和風もとくをひくふ

うしろ人やもう風が山まう

うしもととく風うさんふ機

白室への文

うしもととく風うさんふ機

實機 あむじたま七音機意金と機  
系機 いとくじこやゆきの足の足

さるの雨うとう

見 鶯うるぬなむや誰歌のうま  
てきりうふととくとくとくとくとく  
あひかみがむ難歌のうま  
萬の萬ととくとくとくとくとくとく  
萬萬もととくとくとくとくとくとく

歌也と難歌のうま

萬萬もととくとくとくとくとくとく

玄席すう席川の機今機

机をすう席丹青一柳

上舟の舟をすう舟

人を暮おまをき船のまう

小舟をかきのね舟とれく

うかきのね舟とれく

人の言ひのとくのね舟とれく

呂の言ひのとくのね舟とれく

呂の言ひのとくのね舟とれく

天の葉事たむきとみひを  
せうへふうあらはる各下の

ふわうい色照絶の序  
きどよじ花が山の  
まつりたのきねう萼  
の森そそがりいんれく  
あひきかう

花雲 韋馱あまをさやうしたのす  
蝶きめうつまくや花をなす

そめ蘆

あれぞき蓬はよせうはあり  
宿也 沙幡劍

鷺の毛くろこめや風の雪

花雪 美妙や宣平先生ハ花の雪

上野の舞

花 花も強りお識名を刀を處女  
夏才か酒至と美く始を

沙神

花ようだ世持酒あらく舍思  
うち山やか極美く見ゆ花

熱燄も出来ば世の花も

紅毛も花不思議うるふ鞍

変化じとのはなまく花は風

たのうごとくて絶うる豈

絶うる

花も變あひて我う候あう  
ちの風も變一萬ふたもあ

さほや花も變あひて我うあ  
きまうるがなも金紙はしづ

波水鳴を

春海のねひ花うれ

行山道

樅の葉うたうまうすこころ  
花咲て七月悲うるすくも

物皆自得

花も風あひて我うあすみ  
あすへ捨とうやるのを失  
のくまみるまみの心を失  
ひを失へ里に失ひと

生あ一樣のほひの跡を

車のとをりて經ふ  
是處の城とすむ

さきやたのあはれすあらう  
亂竹庵小牀とまく旅

のあひとあうは  
花と荀子歌や二十りやと

亂竹庵より旅立を日  
あやしくてれもすれうか

おせやたの旅坐の於ひとて  
龍門二ち

おみだや上えの出来を見  
港のふゆるから歸るに

おれさうふ日この朝やけ  
あくまどん上あす月あす

あく度村とて

花のうけ緋よ似る旅や  
吉博のすとどもく

四方のよそを詠くへん  
かくみのうきと

鶴あすかの神のうち  
あーと人のなきあ

葉ふきぬくは葉づ

ねじとがなよゆりけの身

え方す草きよめの身

ほ勢ふ勢つ旅は身の

あをもととなみあく

及ばぬゆくへての身

あかぬ身をうきと

ひとひまくまよまられ  
る和歌とあらの身の

身をもとせやのやまと

とやくひとゆかの身の身  
ゆきあらゆくと

うふさんゆう

竹の木のとくあはれいり  
種きてたの身え持たう那

身をもと

旅衣のぬすむわんき花  
伊勢の国花せの花を

おのまちまちの八年積の  
料よけと化すと云はば

待まへ

一里六三里とむらの五疊弓  
後坐をねまつて

ちゆのねどらや本ほきをあつて  
西岸を走る

四万十川が前まきをあつての山  
あれのみ波くうるをうる

嵐山

花の山二町のわまと大波く  
支考う漢兵突くもとまづ

はそろれせよとふえ無日吳

本店の内へよう波酒一樽

夢うの福酒茶一栓がう

多と人ふきりとて

波波とれ酒は見二升持

西行旅費

毛はそく毛はきかめと  
あひすむきのゆく

さかまをあれとあらうとされ  
示門人

さく蛇とやへりうるをむと  
崩山の事とて海きの通

登の便

ちるなやもとがくく波の塵  
病沾ふとて

西の度もあんとしの庵  
櫻とあくと雇布小せんと

花と無のうのあんとよ  
花と無のうのあんとよ

也とれぬとゆ

坡と御と根とよとたの別が  
流石とものくよけと通う

もく起か波うたうかひうか  
茶摘 摘えや茶と茶の種とあそ

茶店

躊躇 ほしにまうみふ千縞裂く女

茶漫

茶山やかねあとのタつ

大和リ郷の時丹波市と  
やひ市を見ゆけ

卷之三

藤  
多分と常なるもやうちの多  
那次のまき算寺ひくひ孫  
作の少庵をもうひて  
角をすゑてねうすうあひた  
おもづけ生えもよみえづか  
山吹　山吹の多葉のたのからぬや  
西河

画譜

山吹や立ち花の張拂の白い花  
すまふきや立木の花の白い花  
立木の白い花の白い花  
立木の白い花の白い花

徐昌九

朱昌丸

田舎者より之をと達  
春暮のおりはもよおひもこれ  
まよひの里へうとうちの里

卷之三

妙音天女爲多羅月之處  
乞取冰精去

りよととの人となりまう  
うむ仰きをもれうみゆう

乙がおもむくらむす  
馬あまの福よの馬のまづけ

かくのまへをかのうす

まことにやうやく人間は高  
いえの國とある

## 夏之部

四月 がひひやひ本音が四月の櫻粉  
更衣 ひの寝てうなずくをかす夜衣  
短夜 ゆうねや歌の夜の真夜  
灌佛 はなやかひあらす鷲教のう  
あらひを

淳化の日ふ生れ東風ふる  
尾張よしとまかわ附  
牡丹 やえ薔薇ともよばる名はひ  
枕屏 鏡を自画自縫  
さくらの香ややえのうにきる  
杜若 がさつてこむらやいのう山の新  
あすこみゆきとくまば牡丹  
大波瀬を  
うれつこと浦もぬくめのう  
山崎家經庵をと遊  
及のやお遊くもととくせ  
うきうきこと遊へりうど  
ひがそひのゆみよ  
きうきたまくわまんじだ

## 鶴屋加里子

桜木城くわ段のひりひり  
聖葉 白きやくもひだりのほん  
緋杜園

さくらふ羽りく葉のうごみ

波瀬

あきな波はうすくやほのう

名不八体の内

秋東門

うきせふ紅葉はくえんをくわ

甲斐ア

かののまくくあくとひやくか  
りひねねやくはくはくはくはく

五月土日武府とゆく

かくふ節く人々川見

まそ遠見を外別のあ

とうひきく

妻の絃とたうかつひ別ひ

拓撲寺

着葉わうじそ青日射すゆうわや

日光山

あくまきまき葉つうそれりあえ

ほら葉

木下 岩下ふかの岩下と木下等  
をも岸寺寺

夏木 あつぎも木下と木下等  
立 幼稚庵

生ごのむ林の木下と木下等

大垣の垣さり木下と木下等

勤毛をさふて鹿後毛る

三田毛をさふて鹿後毛る

茂 茂の木下と木下と木下等

扇山扇乃焉うや風うや

扇舎合

袖花 袖乃花ふ者と木下と木下等

棹大頭和鳥

卯花 桃乃花ふ者と木下と木下等

甚角母とせ日追若

卯日母とせ日追若

卯日母とせ日追若

まろたやうだ柳の及ビ  
獲河のみふへ

盧橋 きく橋やうだらまも木下と木下等

二重軒

敷替 せはきひへひのまきまき

園の庭ま木下と木下と木下等

の築居と初毛絆じ木

かのめくらこまうとくけ

木下と木下と木下等

小智毛絆じ木

藤実 ふちのこい御物を木下と木下等

許だう本きぬよもりいく

叶二のうり

推花 推のたの心うと仰ふの果

たはや社前の縁のすと

木越入小夜の中うらうと

かとまいかう人と碎すん

残余を生ておもとづれと

あくまきまき葉つうそれりあえ

小梢毛絆じ木

一四

新編卷二

とえゆふんとそもうげて  
こあひやうれいふ人い稀

菊山の木うけふ厚と没

けきどかせく

**鮎**

又たひあらの川のあゆを  
なけや弓くみすさうもう郭公  
をとまつまきと他遊作妻世  
口まへきは月夜のわくま  
穴の空からればあれの夕紅  
黒鶴冬うりて松づく時  
春じうるはやほまくふ年  
はく變ん真く雪絶てみ紅  
をまく正月の梅の花うろ  
当りしゆる風やむきに  
ほまく霜や暮戸の後紅  
拂やつの月中のやくすふ  
候蓋うるふのりうこう  
ほテ乃筆の文をよ吟や時  
かくまくはり方や拂ひう  
詠云晴くかくといしき

**表との歌**

都とまくうう人の歌ううう表  
三ちのく一人の妻の山  
人那次の夫のうとゑて殺  
生ふえと多侍君とく  
白や坐ひはせひてす通入  
着事うやもスの夫のうを  
本源くまが持もゆすやがまく  
那源坐うて

**四と接くういこじよよ子歌**

不ト一周忌を風舞  
ほくまくねぬやまた取れ  
み取れむ枝高や水の入  
まことのまゐりや郊公  
安樂うく  
日とまく大竹をある月  
嘗てまくるまのやくま  
ほおでまやみ人のあらま  
さ一年ぢるうく  
もはゆ年やむんむき

仙鳥御りて

田やまややかや市のみだ

翁石傍

足てやれ也ゑくの御云  
あせややまと朝日ふねを飛  
鳥林森のあさまじに桂木  
うき我どこいせよからむ  
行子桂うのゆはに我どりこす  
川ひむとひ一深川の

鹿と立出きて

老鷹あらすや行のみ殺す老の弓  
殺身もどきとておる

久不とく

翁行れりうそすておき殺身  
まきやと子のあらうひうさが

別鹿有友  
鹿袋二まくふわれ袖ひくまの角

翁お次テ段石のをあさひ  
へそいとる用くとくろ  
深山のあらみをしめぢや

かとくのせ  
のまとくのゆて人のせ

蝸牛かくのうと角うるよ深山の

ゆうすけとてゆうすけとて  
くべ二うのゆ

蠅うなぐの蠅もくべ身の蠅

秋の訪と初夜處うごく

蚊翁萬の秋のうごくとてゆうす

け

螢とひやの初夜うごくとてゆうす

月とひやの初夜うごくとてゆうす

虫翁萬の秋のうごくとてゆうす

け

ありやうの月とひやの初夜うごくとて  
ゆうす

上林三入ゆき

ほるるる紅葉碎ともあづみ

おのうえとあせむるやあめ寄  
おとづらう

五月 洪をむひの月のす五月  
洪を名震の御ふみく  
申ねま東方の邊りつ  
くわくとみはまうど  
重まむぐれたのあま  
洪こうあくあくと  
ア宿つまくまくの月の  
ひゆくうく

四 かくみやまくめ  
青雨 五月のあくまくの月の  
さとまくまくの月の  
青雨 あくまくの月の  
さとまくまくの月の  
青雨 あくまくの月の  
さとまくまくの月の

病中自縁

既生て言教きし五月雨  
五月魚ふくれぬや閑園に  
の井原川の水深そ  
さみんハ深厚うじ水深  
中まちもと  
五月の水深にてや光を  
さみれと素ちては魚原川  
日の暮や暮るくく五月  
彦柿今歌伎

五月あくまくの月の  
はまなまくまくの月の  
高川へやけり  
五月あくまくの月の  
五月高川まくまく高  
太井川出ゆけりまく  
かられて高田小逗留す  
小舟や行かみの人のみ  
おあつて二あつうら

舟舟をくわせむ太井川

御承御ともたのまや

かととの同名なれば

さかねやまとうまくし絶好

梅雨 梅あや真もすまう梅の色

行法の鳴鳥

入まことのうじに風をうまれ

吹きまよそ

臘 爰も吉力も骨小きれ狹懶

また年少行ひふ根じが蟹

青に あいだやま絆のねお出づん

菖蒲 あら生うるの緋の弱能

あら草たふねるま難

洛生ふるまわれて冬月は

あら草もとアラムリトヤ

死すと咲て

菖蒲 花あらこねふねーあらうね

芦戸雪

田植 田一枚う多てさうる抑され

達笑の多面くふがひ

とあてまつ國度の後あ

うなまふうるく  
かうて今のは川むに  
ぬれて空船形小みて  
食草あるもき躬みのせ方  
船を放くめ跡空うと  
坐てかくはまよ  
月ほのうらや美の面地す  
尾強の田友よ見て  
せと簇て代く小田のじかう  
ゑ田のえ

筑つてとせすと田植

伏水

早苗 あどうへありあらあらも高  
美ふううの匂川あら二方  
あらううううううううもはのう  
早苗も神うううううううう  
志の人の歌あらうううう  
うううううううううううう  
昔の女の歌あらうううう

てま面小文字ありこや  
山並すうさんすうかこや

よそせと多くもあつち  
ひ各うふせとふの西れ

ひまゆふめんわるる  
はれもよくにれまむ

さすう小音もほへとか  
りうりね

す齒とうきゆめの音もか  
清たまご

紅花 りあら咲うねあれの音もか  
眉柳とがまゆうてねのうれ

舞久のゆ

簪花 あいぢれを空二風の後路景

紫陽花 もりさかや義と小庭の外に

紫陽花や性子時のうそは裏

百合 うとうたしめゆうて居るの

瞿麥 碎て海ながとす候るの上

正成之係

藏肝石心此人之情

をそこかう波や楠うつ浦

の地ね波をうて古れお

貌くれのぞとひそてかふ

無弦の琴うきとすく

花香うきのよるモトと

機面ふうけうり

朧花 亂の花をすくあるうれうら

花と暮と宵ふううは萬が

幻夜庵と母なる比

夕も朝もあいだううたれ

重行多

茄子 やうりや山と山のうるお芋

清田うそ二わの中

芭草とまきあうか草ひげ

己百多

藜 すうせん藜の枝小なる日うそ

本因多行辟日

竹植 ほすく竹行多る日のみかと立

衆実 うそのまもと立あき様の聲内

彷徨者

栗花 せのひだりづくねみやあめう  
豆まそふすまくひく

桜花 さくらとわからやあめ花すり  
龜花 かめはやあめ花すり

李 さりあきくけをはなあめ花

白川の後山うふ文殊

水雞 園ありの宿と水雞ふ園をあ

大津御仙うす

あら岩の小鶴もあらぬ扇あ  
高川さあから佐至まで

脇送へてさるみ佐至山田

さあはとくみくわや佐至ゆり

水鳥 園のあや葉とよじて咲雪  
六月六月やあまふをあく先し

くいむせよりとみどりんと

くわうや松風う跡茶庵

かすみく

水肩 宮乃の猿左衛水肩の紀  
水肩と後病との異が  
中年や頬のあれも詫  
みすう多ううううう  
くうのふうううう  
方へやまくけりうる  
用子力れ人の少神すまや去用子  
暑 榎の口しもてたうあつこ  
ううさ口とあふたうう上川  
新店月あす

冰室 水乃美冰室石乃むすび  
如羽月山

雲峰 すのひく出でて月のよ  
すろうううううううう  
れい おまかまくまく  
林ひとこちのうら  
りくしあくわやまくま  
物や異と情じううま  
風薰 風乃すすめ小迎へて上川  
游カま

緋や風乃きうのむひぢ  
羽黒山すて

うかやまとうとくらむるる  
小糸山だ

ねねとほろてやねりうるる  
石川大山く像

風うきる御城ハ行ひつる見  
扇拂よそらひがのくあタ源  
四神もわのま周の音すみ  
伝名人の御ふくねく

扇使ひなる古びと透て  
丸つるあらあれあとタさき

文舞ふ山の像を傳ら  
きくは

もむねまろ基とすむしれ  
小夜の中すて

いのちなりとるえきの下源  
ねねのまほ葉うかのあすけ

被風里りうけや弱る夕源  
風巻絶引

わきなほ小夜の中すて  
六橋紀あう歌手

ひきう日とこゆうの塔涼  
清風す

きことと残高のを詠まく  
さじうやはの三日月の相思山

袖の開地を

あくみや吹浦がみて夕涼  
波静や萬葉集をあはせ

花の入らへてうみすい  
名古北櫛もよまく相浦

寺の音うつめりて新宿と  
ひきうる夕涼

けくと

えとねや極き涼ひ居のをか  
小朝きと柳木にや浦士の歌

は東の山の納涼と  
夕涼のひよの歌と

さうと川中か扇と  
ちくて夜をうら風のと

相手あそひ女ひ葉の旅  
わらしく男の相識去  
うゑかへては作をへ  
とあがへりて相識旅  
旅館のやうこそひま  
ほれくのへうことひ  
み教のえきかる

川底や岸拂あらう夕涼  
曲をまか遊と田歌と  
おう歌どやうと  
おう歌どやうと

船あくから遠きや夕涼  
川中の橋本あらう夕涼  
船水影毛

渠へらむ西小畠雲の枝の前  
東哉まゝ上うすく

舟

糸絞の毛膳あじ席すみ  
豊乃三

清水 けよと遊あいのゆはる  
後年山にて

株籠古井のは水まつえ  
那須の温泉せせお及  
小八幡えと遷へ奉り  
てあ井三事ふあれづ  
胸ともせふうちひきよと傳承  
ひみうもや當かひくはせ  
汎水すよと時をまくは參候  
光堅すと

あひの毒ひねうえん約お妻  
晋の園のどうやじ  
玄をふき床のあやなむ  
世の生むじふかうと  
ふゆふともきこむと  
墨床の袖とよき

團扇 うちかうとのかぐ人のひあら  
秋のうら

心太 善勝の水汲とて心を  
道耕 少しけて汲みてうへ居ぬち  
ふトの母追若

をさかひきひきひきひきひきひき  
ふねまろ處名ど称し  
て二るのうち

運 はまの香木苗とせうらや圓裏  
枝をくせかがり木をうる  
登負 ひこうやふ萬に山源むありれん  
さうあらすと

ひこうのみりお城る屋をが  
みけふよ是うれをがれじえ  
平田寺子幽うかとく文の  
ま行り

登負 ひこうのせうらの木の山  
夕負 夕をふえとくやどもひうる  
名のゆくゆの後繁の旅宿を  
ゆべあや聲を歌ひくみの完  
タクやふ千孰じてあとへなり  
水葱 かまくらとあたり上の鏡の湯  
かまくらとあたり上の鏡の湯

甲斐の山

萍 も山賊の頃聞るひうる御  
茂於のゆくゆのまづのまづ、  
暮して搗衣ふねの下  
湯にておきの熱とか  
まきひあそび

丸

山ナキや身を古りんれけり  
ま東ろ別在うそ

朝をあくよとて涼しげの丸

うの皮むかひてうわせまを毛  
真葉 実のと秋やうわせまを毛  
もまつ葉たてうわせまを毛  
柳の木ま行若の涼一葉の葉  
え石と等て  
散松 緋の木と秋一葉の葉  
兼葉 ほの木と秋一葉の葉  
蝉 指うるふ葉のう葉のう葉  
柳の木ま行若の涼一葉の葉  
枝の木と秋一葉のう葉のう葉  
洞へてひうる木

かく我のきみなみうるば長

稻葉山

あらうもやるまちへせみのを  
おとせり

おとせり

夏月 諸事事やくろみをまどまの月

きどかと弱ふむる夏の月

なづの月 月はすこしあはや  
大津本郷をもと

秋華 桂はうじんのよつやにあそ半  
武儀のねうて

夏雜 楠よりおれかまこと三月に  
まちる

キキがまも紙衣の脚汗が  
さうむやまゆひふけに玄鐵

甲板の船団とりの西く

きて途中の若竹

ちやくへ我を経よるまが

岸一庵

なごみもまこと心とおいくた

を出やなうのりか乃舟さら  
舟もや坐もてりうるまの舟  
かく山や松もたわの一里うの  
とまもむとくとくはまうの  
月と三とおれまかはやほくを  
底折のゆく祖きの

よきとくとくと博て

うえの風

おほとく風うきやまの風

那波の先ゆつて

まおほ足踏とぬむとまが  
くつむや海潮とく食ひか  
株をくへとあとうのゑが

殺生ふ

ふのまやかうもあくま黒

ね鳴

あくやあく小舟もとまのあ  
ねくやまと夜裏のゆと月

秋船もの佳景と對を

山もあらうむかちやまほん

雨前山家

春風うめゆすよううわ

ちくはそ

井物水の構

芭翁や水の構の入

曲や水の構

えみおや水の構の入

うの秋や水の構の入

かきの湯や水の構の入

類題蕉翁發句集卷二年

類題蕉翁發句集

秋の部 目録

文月	今朝秋	初秋
來秋	残暑	冷
身入	稻妻	七夕
星合	銀河	硯洗
盆	墓參	魂絆
三百日	扇置	角紙
露	霧	暴風
秋風	散抑	木槿
桐一葉	朝貞	蘭
秋海棠	女郎花	芭蕉
萩	萩	芒
角紙草	葛	鬼燈
草花	飄	葱
蕃	綿	冬瓜
芋	蚕	
竈馬	蟲	
蜻蛉		
裏虫		

## 冬の部目録

小春 初時雨 時雨  
木枯 初霜 初雪  
初冰 冬蠶 炉開  
口切 神苗主 神旅  
夷講 哲金講 冬枯  
散紅葉 落葉 杖葉  
復花 麦蒔 莜麥刈  
大根 枯草 枯葱  
枯尾花 冬牡丹 水仙  
寒菊 枯野 霜  
雪 雪見 山眠リ  
雪九ヶ 圓炉裏  
寒サ  
火鉢 火桶 炭  
埋火 頭巾 紙衣  
蒲團 食鉢 敲  
霰酒 河豚

鶴 八朔 落水 各月  
十六夜 月 今月  
砧 雁來紅 芦 葵堀  
粟 菊麥花 初草  
松草 落穗 早稻  
稻刈 四十雀 稻雀  
渡鳥 落穗 鷦鷯  
鮭 蟹  
後月 名残月 秋の露  
御辻宮 菊  
紅葉 木の實  
橡 橙 捲の實  
行秋 暮秋 秋雜  
柿 紅葉狩 鷹  
行秋 暮秋 秋雜  
柿 紅葉狩 鷹

生海鼠 鴨 千鳥

鷹 師走 寒

早咲 探梅 節季候

棋掃 餅搗 餅花

衣配 古曆 年忘

年取物 年ノ市 年暮

行年 冬雜 無季

目録終

類題蕉翁發句集卷之二  
古終舍默池輯

秋の詠

重江はそ

父月 父月やたらもの秋の秋の父月  
今朝 けうね再掲さく父月は秋

呪魔歌を

初秋 ちつ秋や滿もち因の一三九  
かめやたこなうのせ秋の兒  
来秋 來春さく耳小たひを秋の兒  
あひ外を書ひやや秋の唐  
タクヒヤクヒタク秋あまつぬ  
残暑 生ぬや小故の三冬子に秋暑  
雲津の唐と秋暑のい

冷 ひやくと秋をすてと秋  
江上の波舟とおとと

身入 水きりをくと風ひをかねが  
身入

身入

霜妻 ひあつまをすふとる葉れ絨場

富翁歌

あのまくらをまくす

或む鐵の白くたまう様

大底のとがとうやいや

らううらうく

のあまふね人のまよ

薬津うそ

のあくまやかのがのとひめの

本君うとうと小骸骨

とのお由岐とうきて被

する古とおで井さき内

壁ふうけうすとふ生

あのまよかとうげ遊

みとあんやうの罷體と

枕とうて絶えまとうと

こゝまうゆもはこの生

あとあらうわのなう

のれまやおのとこうすの穂

穂生あやまめ方りみ経のむ

七夕月らや博の二音を聞かぬぞ

ああがくあらぬまよやあゆて

仰やかのせはなう

口宣へ詠へ人牛

きあらやはこう役のめぐ旅

七夕や秋どまうむわねの秋

鳥おハ待のうち

星合ほく合せやたかん桂田川

合歎の木の葉をもとほの木

あまの母七十あまり七

とのれせ月せりふとふ

きよるとあまの十を

よと歌とす是とふ

なる老七八は能くふ

是をあくセ思の歌う

なうりん

七株の木のよかやまの塚

ちよかの木と綠葉や木の上

銀河水あらのよのよさん天の川

出をうきよ

わくらや絹後よよよ天河

観洗 滴水をかきあへせうせ草履水

骸骨の譲

盆 夕たやを並御行ひ船舟に

甲戌の源大津まで

どこのまことの許より消え

すくいまが舊をふゆり

ておまこと言ふと

墓春 家はる枝小夜のそよ風

魂祭 美代やわらそとまく錦奈

かがみのかざる

熊坂うつうや川の端まづ

もか山

なまうううむはぬのひかえ

峠をう四本さわる時

二章 旅うひ三百十日をねまう後

たまく天孫ちと生まゆ

とまく

數あぬ事とお思ひを纏奈

金以のや枝とわろひ

とまく

扇置 そのおとわひさまくふす

角船 角船や笑を船の角力

むうしきせ枝文船と角力

はひうや魚く

猪すの竹もよす小舟の舡

芽艸あり崖うて

露 露ともくらうも厚世うわ

とまく

魚のあれもかまくねづ

そくふわふ

りすうやおおしまえのあ

二人のうち

ひうとひうかやあたぶのあ

一重の度の度上空をゑ

とまく

ゆゑのさひき味いわるか

絃琴の傍

霧 霧かやおれをまえに初

嵐山のまく吹き草木

立木へ仙の塔をみあう

古事記を拂て蕃天成

がくへ日月のあすきう

と風をあくむうふれさう

表うしてこまきすみまえ

けいもちとひぬまう筆

をどくらうり蘿姑

射の弓の神人おそま

けどよくせんきく風を旅

せんう

やうの方の野時雨あをづじう  
きう時雨あをととくととくととくと  
暴風 暴もとおふねうめくうめ  
ふまくねと不もふねはめちが  
秋風 桂かのとおとおとあく秋の風  
秋風のゆうやくやどりつむ

猿喰人金をすふ秋の風のま

博捨子

森朝のこころゆう村の風  
や風や歎き空をあ被の園  
あれもと大樹をし秋の几  
一矢追若

横もとれ我涙の海の風

蓮中

あくとりのまかでむ枝のを

那あむねちよそ

不山ひるまうゆくあひの風

絶施夫号

れの木のまのまうりの風

中村とらて

あひの風は嘆の草葉の紅葉

秋の色吹くもはな葉の緑

生太く旅

人の縁とまやがうれ

かくの聲さうへるか風

まう枝のうたと

秋の風や相思萬く音の轟

伊勢守の歌

あひうへあひき月一秋のそ

桜松金扇

秋きふをと承た葉の秋

水う猿絶と送る

え送りけじよやまの風

柳陰影

おかねきあはれ我い達とす

全昌ちゆ

庭端て物あらから御

木槿

花あ枝とさきのきとす

馬上少

まどろみ木槿花とお宿かす  
よろひのまほ小室へ旅にそ

嵐雪

朝負 傍朝只のく死入るは空雲  
おみのなむ宿り故のより

和其角葉量り

山鷺幸

白き鳥ふせりうづ古里うず

嵐雪

朝鳥のりのまほへ夜を

人へ郊かふほくゆく

二重とがひく

たまゆらゆめのくらぬ葉

閉園

朝氣やひく後めの音の音

あきらやかなも又我支かれ

秋風

わきの風のほほ

指と

あくばくとあはるのをみ

金と

葉のあやめのうかぎと

秋葉

代の葉あれのうかぎと

女郎花

まつりのゆふあれを女郎花

ひまぐくとねじりとせんじ

## 新の流

東のあくびへ難をとまつて

雪漫

芭蕉 菊はやそのひよきと秋也  
きよ倉のゆ

ははと桂もて盤かゆどす秋  
ひきのと一ふのとせとか  
義のおとや葉せのばくや  
扇のとせや空が氣を以  
そよあやて風のキセ山のへ  
じうかぶせゆ月夜の月

夜坐

ゆまむりともがくや雨の萩  
萩の渡

鴎のさやかはくはく花のう  
いの渡

小舟ぢれすすのあくべみえ  
重續

あくべとあくべあくべ  
あくべとあくべのあくべ

## 紬りとくそ

風さやかとふ袖し色の萩

まほせち老翁あらじゆか  
とくがまうひとるとる

りく

芭 芭のむすめは里のすまか  
角艶草 なわせ角艶草の花の鳥

家人のそよ倉と翁と

まこうと行きかのあせ  
時のうみのちあづかくあづかう

機や今どうもむとく

ほの葉ハ昔あざる紅葉が

碧燈 ほのまつも葉がゆくやか  
きのまつは細川吉庵と

美園の花の花とあまう  
まつうへたかくまのまくわ

仲秋中の一日は西の聲

ま新の歌とりて

瓢 夕やや秋へづくの新き事  
すくせと

蕙 ほ廟年を送るあやめを

本多源の田舎へあつて

故人の人を對ひ

蕃枡 まみとむねも種をも育む

かくらむせの蕃枡を育む

たまめのうもあへ唐の

萬そむめのきのど萬あ枡

みさう田舎へ

綿

わくらや綿をあまもむけの実

かくらまき

冬瓜

冬瓜や豆くうはう秋の朝

皆仙風

牛

も牛くひのせまふはるを

西行谷

虫

よはる夜の虫へすきん

夜の宣傳が實れ月下の蟲と實り

蚕

糸をうなぐや繭のまくら

春をや繕うる蚕のまくら

牛

牛ふ事で糞ふへやまくらを

ねのくもすすむきくら

立

立ててすくはまくら

鳴  
かわやつむ禪きの勝の家  
鹿  
むじのやすやああみこな

ひきうそ牡鹿もとや牡鹿

をまほそ

ひと等て鹿もとよまは鹿

をふハ神のうち

八朔  
八朔や天のそり立たぬアリ

曲琴すす歌おさ

夜寒  
れぬのかとぞうとぞうか

六脚あまの二人ともと

鹿と初きとぞうあちや

きく

秋暮  
いくふ里ぬつかりのやれのし

きの旅をねらてくほし秋のそき

君乗すあま運もがくや秋のそき

あたのまつめにほのうのうむを

本因寺や

死もて奴旅のほそよあひの書

御川の庵

旅郎の房跡まき秋のそれ

笠置千鶴のすまうけのれ  
立行自画像

こうむけ我の拂き枝のれ

祈思

ひきやり人すこあきみす  
ああいれあらまうこう中根

落水  
作あ伽藍やニ交起も落水

言月  
三月月や船の多月せん

三月月やとくまうまく船

大房根成船もく流さか

行ゆのえまも船三月

嵐葉舟日落

弓やまのヒタハ暮の三月

下弦  
二十日も西日や冬月二十九月

のまうあう石ふ旅立ち舟

の車木ねどあう壁の

あ蓬うひとまう御く

ウリヤニ十七夜三月の月

武藏ち春時に雪をとて

とく岐の原をとてとて

とくとく

名月 名月のちや五十一年余  
まこと名月の度や宗山

穀がえ夜泊

名月やわたりよりなみのた

名月やあらわにそも開田月

萬葉

夏うすて名月あますこか

名月や湫水よりみ七小所

名月や空き連きの半のあん

名月や鶴脛たうじを平野

名月やさとを羊架の新む

名月や我あわりとる門達切

你川

名月や門牛は本ほひら

伊勢山中そ二

名月ひだりとててぬきけ

名月と春原のまろや内のすり

名月やだどりとてよもすり

名月や西とも同じき萬葉の

筆載あるあり

義仲寺と

今月三井もの門ももやハ六月

あと儀てのとてあらやうす月

月見 うるうけやまご行歌ひすむ

まむりへと傳る月とす

月のうとくふううねく月とす

麻絣取本寺

まゆゑとまゆゑとがる月とす

田舎

猿のすや縮すうるそす月とす

湫水のねをわる怪

あきらかとすはな御言の

移べとく一葉あみのと

ちうすとく

移ひつや月との縁のぬれ

月のすうよひのまくとくめ

古ち秋月

月のすうよひのまくとくめ

月見物めの歌を

あらすまとすまの月れり

いさみむかしの月の歌を  
あゆの歌を

たちあやあを落葉歌を書

豊岡十あ夜

漫坐と月見りと月の歌を  
すましと歌をとよの月の歌  
たちあやあを書のほあが  
月と月とわの歌をば  
はくわくとこくととせと  
の人がうつ歌を

月  
従をあ月従あうもあ葉歌  
月とあらかそ人を歌の歌  
スイ男すき歌あうるの月  
新天の下うらう月の歌  
まや月あうる金の歌  
アラヤヒ月をねむ月  
おもまうの月うすあふ  
の歌をうたう月の歌

の歌をうたう月の歌

わたりくと月の歌  
あまなひあづら小教室  
いまと歌行きとれ杜牧う  
あらの歌と小夜の歌  
お歌てかとろく

馬あ馬てお夏月歌と歌

神経山

三十日月のやせの枝と花  
川舟やよの葉よの月夜  
おね監うたまを歌で  
月やその時の歌の歌の歌

麻峰子

月あし指の歌をうらう

田舎

草の葉や月は月の歌を  
ある事も歌をとどしあり月  
暁接よそ

あらすや歌じう泣月の歌

月うやに月う字の歌

月うやに月う字の歌

湯の尾

月を名とつゝうむとやひゆ

越山

義仲の麻らのふう月や

え年二年つうの塗り

月を名とえはの四作ふ

遊遊り上人の古劇と

きく

月清々西のあら妙の上

溪

月のこう雨小角力もがまうり  
中秋の夜露がえよとまう  
ねあすのねううよの  
ほよ後うとうそなまと  
まのちのあらと入ててお  
せうとおがちとまふ  
見て引のけと後もか  
ときく

月を達へあづらうの庵

斜嶺亭

月といけのやふうを伊  
吹と云ふもよくに雪  
もよく只孤山の酒を  
あまふ月かたのはし伊吹山  
ほやまふもよくもよくら  
られかうひま萬里の  
くふひくくねとまた  
やふくくねの縁のう  
と寄じけぬみりゆる  
のあがを切て席とま  
うけんと今うやうを

月をひくのゆうまの物せん  
伴を添て室は下  
もよと羽衣ふくせはの月  
わづ面の四角みかど室の月  
あまうと初会

月代や猿ふまと並すの者

消息

やあうなと勝る夜や急の月  
紫の庵と空の年の名

あれもせよのりきね  
よそきなみゆくとお山ふ  
ほろ香とあそで西りの  
よすきみよしむ雲集  
のきくらうひある経度や  
とまくと陰のあせびな  
紫のえの月やさあまくあまく  
緑きよも秋

九を支那とも月の七つつね  
極へ松風松風り晴れ前  
夜ひへるは水うねと  
と徳松君のよそひふ  
へと蕉スカと裁う  
と芭翁とねうらん庵の月  
深川のあみやねと三石  
ふ舟とさへ

川上とこの川下や月のす  
東帆を人波よふ生れく  
妻波小舟とより  
入月の河のれの尼傷ク那

## 蓑牛唐子

今すくは吉井の月す十六里  
睦みよ影月下送見

月をじや荷拂うる四のくも

を御まよふ

秋もそやほづく雨と月の朝  
山もくふのくもやみのつき  
駒迎  
砧

桔やまにいひつあまじく  
残立や荷ふ袖うかゝく衣  
とほぬどあうけうひり地  
のゆうてねすとくすくと  
上の衣とくれて

剥きふるあうね詠のひきむ

すくせ

きぬとせて我きみややゆのま  
ゑ浦てわゆあくまきあくと  
猿あきくさのふ袖と砧あ  
ふぞくけやのゆ

茶堀 やくもと舟中ふもと紫烟波

遊女の盡變

芙蓉 桜の日よりもうるさくも  
きうきのとくよよむれ天の川

鷺糸 ケヒトウヤ石の井のあらわす  
芦 とくにねむるところあらわすが

蜀黍 蜀黍や鶴鳴の秋のとうちへ  
枝の葉を引とせまく

粟 穀作ふやくともあらまの塵  
知見才令まうれを  
とかうと

あれやや遙るふ容子の粟  
伊勢の年後ふらゆど

### 詠歌

喬木 こほか木とてむすめあひひが  
三月の暮れやかうせのた  
初草 之初木やまことねむれ木の草  
松草 松木やまことねむれ木の草  
すみけやまことねむれ木の草  
菖蒲 菖蒲やああいのかくへくま  
かかえのあく入

早稻 お播の香やう入木の右脚あ

### 詠歌

稻刈 せうせうひのうじらまのいや  
落穂 そくじとむらかじうんまのあ  
稻雀 稲キラヌの鳥相や近まう  
渡鳥 国かううきやあとのわくう  
半雀 あの鳥のあととあとほ半うら  
笠田うて

鴈 痛居のおをとよ居てなひ

鮭 繡きのうそんまのわくう舟

鰐 かづか船やほのとむせい  
絆 絆きのうそんまのわくう舟

仲秋の月と豆科のまや  
疾苦とふ小聲やみてれ  
ありの間も波くうら  
よだれと夜りあらぬ

後月 本と月とある月と後月  
后山と清き

龜月 榎樹のまづ月は名稱を  
後月の市よまうて

外市外事ある別うたる月アホ

内事内事あるがおひなめすみ

母の白髪とももと

秋霜ふかうく消ん滅をあきれる事

を陽

菊

善の少しきさくや一ねあをき  
海に縁て隠むからや西日本が

蓬代のよき菊やかきと

豪子つまむが若山のすみと

ひきゆかみ酒の余まると

またと花やくわいれどもす

我身へは年後りもかゝり  
あくえ半と

そよひのうきよと秋のうる菊

を折ちとそ  
あくえ九月とおゆき

紀の菊はほのく水のあと

かの菊のあくえ

中間屋ふ陰半里人の

日は西の扶桑三名の其

一つとすとも落きとす

あらへあはは肉うかひ

筋骨すゆての御身

くゆふれととむん

ちば被の袖あわせと

あじききの菊の枝おも青ぬ

本角多

は萬葉と菊と本角二度

あくえ九月

瘦あはれむとお菊のかなが

さくみのけのうとひくへぬうとが

田原うさぐ

稀とのの匂すうとしきのうと

は萬葉のうとお枝葉の

うのうすか壁とふくじ

葉とく病どもくあまね

秋葉八月の中菊花に鶴

いとちくノクハ

蝶も葉を飛と變ざれ鶴うか

九月九日こおう一枝と携

ありばれ

まひでやりててすほの葉の角  
スミのあはせをの漫れ

岱水もすそ

新作で菊の香のする至高の草

八月始と

きみにむかひをかのいへせう

大のをどよう

登るおやかなつらの聲がの鳴

周かう

白きくの風ふきとこう音あはき

あらわうて

きみはまやまかね古紀松

菊の香やまくひ代の用ひあり

くわくは

筆の香りくさうのわきわが

生みゆめとくとくして

きくかゆとくとくと活けたる香

菊の香

物言ひ跡まろきくのまある

え縁まもゆく九月を臺

萬國の遊を病のまや作

育のくふまみけらうと

そひがひまくあひまくあ

萬國の遊を病のまや作

育のくふまみけらうと

そひがひまくあひまくあ

萬國の遊を病のまや作

育のくふまみけらうと

そひがひまくあひまくあ

萬國の遊を病のまや作

育のくふまみけらうと

そひがひまくあひまくあ

共山別名

木葉を落すて木のまみ葉落弟  
摸實 摸のまみ葉落弟の木のまみ葉

木葉のまみ葉落弟の木のまみ葉

木葉を落すて木のまみ葉落弟

幻夜昇りと事由を參  
のアスナリ

柿

萬葉扇と柿とうれきと並の扇  
ちか柿や一にあらふ様のつる  
譽田惠那う体ども

但又そ貌とのみの便や柿さん

序聲を嘗め

行秋

里すと柿の木すとねあむほ  
り秋やあわせとしと三布充  
始のうとうとすれんゆく身を  
絶ゆの秋ありやまくさん  
ゆく林やきどひする栗の跡  
清ゆの草店と遊ぶ

暮秋

いづとおどちうと林をきぬ  
情老杜  
枫詩とせと在秋歌え歌ふを  
秋雜  
足波の浦とひそむは江戸の練  
色のりやきそらのあきと桜町  
酒あわせりとありとと角萬  
深川の扇を繕ふと

秋十とをかとしよとせんと

扇歌林前

このねのう美半せし林や秋の林

田と歌

かづき一田角の鷺や空の林

笛別

送へねうあうう家へあはれ深  
ううこきく林やうせせせうの淺  
あうあを庵ふくとあらねて

秋風へきとあひやか葉す

小ねとくすと

あひじと名や小ね吹ふ林すれ  
種の渡ふと

ほのくわはすと緋ふる源の林

田徑庵と

旅宿や林次より人の山  
旅宿よなうと林すと葉すれ  
小名あはく相美無り

林よのうよあはく山行川

車扇を二

あらの夜とうらぬるはせか  
あつて秋遊うすとゆく  
紅葉せふる人をり森  
とゆくお祀りせり  
れどもき秋のね葉やちもさう  
いは秋のせきつと遊まふ山みち  
秋の母やあの中ひ風のむと  
唐からんとて室うそ  
せうる爲めの旅り  
あきらめぬる秋の意もあふう  
行きてやがれあきの柳の下  
旅宿

あけねりてまとうきよも

せきねり

秋あたか月と見る人を

冬之部

小春月の後かくかく月の月

人の行ひ勢りて

鬻るもあれゆの字と我ゆる  
とやこあととまのゆのゆ  
らのちかうじとゆのゆと

かうきとがゆうあき

や旅人

旅人と御ゆるまん御まん

伊がうの山中

御まんの様もお裳とやほゆ

行ひゆうと

春をうるも年よりゆく  
時雨。やまねとれの名もじ  
行きやたの道かへもく色  
りくはる金ともおまことゆる傍  
あがみもとあるとひまく  
扁舟をまくと

下れ殊やゆく小石川

底のゆくとゆる水邊を

多事かに我の志をもとめんと  
相思のゆへあはくまう  
名れあらへどまくを  
さうほ

はあ小まきさんをすへれ  
ま槍たもあくまくのとへ  
あくまや舟り物あふれまき  
船のあくまくと牛馬うれ  
一座船があくまくと牛馬の雪  
夷馬雲井宿旅外り  
わくまやをこのじと

化りまの庵とくある時もが

四室の居所

あくまや田のあく様のまじ役  
・高田経場車の家よと  
者あくまとあくまと時もあ  
こまかあくまとあくまと時もあ  
氣もあくまとてあくまと時もあ  
山隣の井戸の聲うまきが

羊の庵

人ふとくまよ高めまじゆ

笠の木の道の風あむくい  
旅衣とまくとくの風  
あくまう傳つうまくい  
人神とあくまとくの風  
むくむくのオ士はく  
くまくまとく風もく  
むくまくとく風もく

木枯

ねうあくまの木の木もくの風  
竹の木の風

こうじや竹ふくとくまくま  
あ竹や竹とく風じ人の風  
三河朝櫻の風牛山の風  
種あくま

京ふきとほくとくの風  
風牛山とく風もくとく  
あくまふきとく風もくとく  
初霜  
か一や風ふくとくの風  
秋の木の初霜とく

富ふあくまとくとく

幸あらひひがりまく  
竹まき八日ちうてまきまく

さるよろこひ

## 初雪

そへ雪が章の屋あそびむぢち  
ちあらひ大仏事務

ゆきやいづれ佛のそへら

もくちや否山僧のやゑのう

ほ川大橋まくらる船

けり雪や脚さうる船のく

初雪や小仙の茶のたまむす

山中ふみけとわらひて

ゆきやく冬の波の聲つゝき

## 初冰

芥川やとを霜の田井のくう水

冬籠

あひ霜やまこ音をうんばくら

金魚のねのうらふゆ

## 贈酒堂

汲水の聲とひかる用

櫻に匹草るの聲のとこ

とかそによすも馬も

ふくふくのあれ

## 絶壁障や圓すのあきらめ続

接せうすと

圓室とまてあらぐ圓ゆか

カとまじめ人あらが便け

う水あらふおど若

しめふどまくらぬそり

蕉ぬら展う功とあらひ

幽微うねぬとちふ湯や

みのくらぬあくべく

至てむ上勢の人ととく

物るむ御所とよも牛

かみとあくわのとくと

よきうへく

## 生枝へ梅とさくのあく

み川まくふ遊く

## 折のみ桜吹とさくやまく

煙閣 姫ひきやなまえあり煙あら

支渠まくふ

神の  
當主

ぬきのああらわる御の御事  
お月のうらめ事なるか

神の旅 郡の神も後麻の日教も  
夷講 えひの傳承也ふ講もまこと  
あはまの伝めりあつ美津

御講 義経院さうじくの令傳

御講 消え

内命溝や地のゆうみ酒井  
冬枯 らむやせもとあんづる  
そぞれの強がはむとて  
月の仄とよくとて  
み旅の心とて  
散葉 さうづ廣や屋もくらむり  
あむらの平田よ地とて  
さて及ぶ百年を度を  
名脚をまかのそとば  
曰竹林ひをふ天子都と  
うとまくとふあらと  
あて游湯かわりへけ  
りうち

落葉 百キナリと庵の落葉

多度の松原とさす

ま人よ残をとらむと落葉

大庫を過る

木葉 二尺のふちにしの木葉  
れをの落叶あゆ  
佐とひく石と源川の邊  
いふうを詠あひな木  
名利の階をとめく  
金をきのべり絶を  
とみる人のかくそと  
けむるの身のこゑと  
あらわや

落葉 戸の落葉と身の禁の先  
耕をとめく地と  
落葉 こほくはいやすけがれた  
遠杜の二のうち  
麥時 麦生のよきことかくわくや細ぢら  
落葉 かあやうの落葉と身の草  
消え

大根 三十里尾張大根の活ク那  
呂の後 大根の外さむか

## 清風

はよこをすくらうおお根  
大根引とあると

鶴見糸小野とすおお根引  
と等く波日大夫お根引

主屋の旅館とおお根  
とおお根引とおお根引

枯草 えまひそおお根引とおお根  
おお根引とおお根引とおお根

枯草 おののくとおお根引とおお根  
三軒を経て深川のま

店ふゆみの根引とおお根  
おお根引とおお根引とおお根

鶴見 ごくからむかとやまね枯草  
葉名古屋とおお根

冬井 もりやえあおとおお根引とおお根

## 鶴田 拾人子とおお根引とおお根

周とおお根引とおお根

水仙 水仙や白き蓬の花とおお根

三の三とおお根引とおお根

二人の根引とおお根引とおお根

寒菊 その匂ひにすう向い水仙花  
室きくや粉蝶のかう泊の浮

枯野 うわく我と絆うる枯野  
絆ふ病をもつておお根引とおお根

霜 まろ山の冬をねり咲むと  
あまれふ雪が半身の花和歌

うりとおう一瓣一瓣とおお根  
おお根引とおお根引とおお根

まとまろ

富士と湖と源波ひと手とおお根  
梅田とおお根引とおお根引とおお根

かくとおお根引とおお根引とおお根  
よお根引とおお根引とおお根引

連枝茎二のうち  
さむかとおお根引とおお根引とおお根

鶴田 拾人子とおお根引とおお根

音の葉の表を乞う所のを

病中

主のむかへておのれの捨る所

源川大橋も越せし所

みうらやまのて渡橋のしゆ

竹道どよりとかうそねりと

雪

耕月多

空とまよ上空の都やすまう  
あんじう性子重い山吹のみ

里樹と向とりむけさゆき

ふみめにふ人のことと

あれふもやせがまきの君の行  
主の絵や物語あつ家士の君  
書のりや宿禰の國風ふたき朝  
涼のまだこまりや水ようく花  
ひめき相原と國の祭う御  
ゆき井の田緑うる節あん  
宮の朝ひとう千種と嘘ねう  
波水うらえぬ一うはきの雪

庵すううそ

源川や振ふる葉意きうら  
拵月多

市人ふらはうへんまうるそ  
社園をすうを申あまく  
のゆあくとくうひと

重とゆだるまひ門のひ日ひ  
おねねく人わざりとめのき  
縁へどるる

ふどくあうじうきのあこと  
まよふとく

庵掲て雪をわううき  
まよふとく

聞ふ歳ありとふく  
角のあくとくか拂ふとくの雪

竹浦舞葉をすうと  
竹浦舞葉をすうと

萬葉そひすうとくやまのく  
おのうきく

源川高經房  
高經房をよむ

萬葉なれば遠む清一ゆき見化  
竹浦舞葉をすうと

おのうきく

さとせられて走の後あがめの  
黒あられせよとか今大  
津がまえうお月くと  
お月の経あつてかゑ三  
かと達致うつむかうろ  
すみき

おねの心の幽や志望の言  
湖水賀を

牛乳三上雪はわらを筆の猪  
太雪やはあくひとうた氣のあ  
りぬかじ精も雪のあくひ

小町の雪櫻

羊山ややかくぬりかくみよま  
るあ尾は士あく

本松のあく雪やよまの雪  
雪とふ果をむほ居う那

竹の煙

たかまく言咲井のけーたか  
雪衣が南の松や生まう

雪  
夜寒が月口天をか言と云ふ也

古年のこひ事とありひ  
此ぞ越人よかく

二人入了雪へそ事のなづう  
山と獨れりそとやきのゆ  
昔に行うればあう  
きくうか法ヤ一うて朝

あ印へあふ幼つまう我  
咲のりとあひ竹の葉  
ねくう物となりまと  
考る事が多とおこなく  
く性は事とおもへそ  
きくうひとくうある事

雪丸ヶ  
若大さすとお酒を主金をけ

深川を夜の雪

水  
樽器は宿をあて湯水う房を處

茅亭冥水

冰苦く便革う惆どふ解  
あまう解をも

まごひやうよあ水うひはく  
と泥轆う轤車のふどくろ  
山家集の歌かかへ

（まかしこわくめのまのこかくうね  
船うねに秋の水の風ええ耶  
さすがくらうあらんかわれ  
不山のいふたりるあくまきが

## 自盡自殺

（うめうじまやあれの榜うま  
猿のまみたと人ゆる  
豪きくありの椎葉をあ玉まん  
ちゆく

多くのあやねするまぢられ  
ぬれるよそ

（屋壁のゆゑや三弦のかと義  
再若葉産を送りとあまこと  
竹のゆゑやはものゆのち和  
室に立て居り半身あれば  
難水うね碧きうれのまび

## 地下の草木居そ

寒サ 桟あをたのとよ武あるをむ

神人よ高禖そ

さむれとあら猿轆をなすりれ

え乳れ鳴うつ内どうう

（うるうくもうる

水をくせは今うつぬとつ耶  
緑うや寫うひりのれさむき

塙ノ綱の葉うきうきし魚の花

仙代う父の娘子

袖のことをむとを濃炭

葱白くはまくらをまとが

相ひまくらのばくらまくら

火鉢 きのくはまくらふけくらが  
ほくらの縁のこくらをまくら

火桶 ありのむすようあらやく桶うわ

方と代どあひて

まの屋根よはう火桶うわ  
少くらむよるう人の灰さう

炭

白きやう浦のうるをのと  
浦一すとおもとよあがめ

少年どらひ人ふ射

埋火 や火をきりやゆのまく

曲の縫破

埋てやむるのあめの敷かじ

真体翁の便

頭巾 手あらわみのまつ筋

深川ハ美う中

迷路のまちの事やうけ頭巾  
ひやうてれどもまくらはれ

紙衣 かとこもむやまうとまく

まくらをまくらふまうとまく

蒲團 かとこすとんとまくらはまく

すまく

食 たのむとく膳局あだねの飯食

彦子金ふ汗敵と竹

鉢敵 ちくわうせんちくわうせん

ぬまくわうせんちくわうせん

靈鵠 えだどうう天のてんづの鳥

乾鮭 から鮭やけうと魚の干鮭

汎服 ああふとおゆうふとくとく

あけや網すきのふきし割

あくゆか古きぬ復元

アカウタヒタヒアカウタヒタヒ

東名よめとて難田と

あとひあらかくとととととと

毒簾 まうくいとうふ本のあまこと

尾張のあ熱風かまつ

なまこうとく脚足のあ

そそとくとくとくとく

鴨 ぬまうのむうのむうのむ

山名とく鶴むし鶴の名まく

夢みとくとくとくとくのとく

千鳥 ひきのとくとくとくとくとく

林あらねの堂 はなび

おひでうとまくらのまくら

里宿の風と云ふとやかまう

杜をとほりうなまう

たみくらすをうねりゆき

梅園うふ草とほらだ雪

ふるそと雪のゆどわせ

きまく

まもむらうのゆきをひりとき  
月夕しゆきからゆめう蠟燭が

師走 月夕日井さゆ

旅馬うあく你きの夕自殺

五首毛へえ服の夜うて

暮や立半とおとうは旅是

行はは旅まの常より、物

うれきう旅まのあめのう

うれきう旅まのあめのう

月光のあめと月のあめのう

月光のあめと月のあめのう

月光のあめと月のあめのう

月光のあめと月のあめのう

寒

なまふとてほうまことふ

う一里人の夜うけうとい

つまの又ふきとあまると

もあくはけれとむらむ

かくはせとむらむ

早咲 梅林をやくわんはみの里

信川 信川

松梅 木と松の梅あはるる野が

うらどうと木と木と木と木と

節季 芸東みの木と木と木と木と

あをとらのまむ

多事ひと花のあめとむらう那

焼掃 焚掃と焚掃と

すと掃のあめの山の山

い御のあめ(其物被ふ

拂一毛もとま年移ふ

経年うおううると

まやせの煙拂ふ古舎の

二二  
七六

卷二

十一

すま陽ひあひうれつうひみかに  
餅搗  
ちのめも三すりゆと餅のまろ  
くらべて餅と餅のむらは勝る  
ゆきちややさしくてまろやかうまい  
新八絆のうち  
衣配  
古脇  
幸志

洛の高き色割をあらそひ流丸  
鳥

半身もと腰ともすらやまうされ  
また腰のゆくゆくの暁  
月あらかじと立雪をひが  
り氣をあすきとむく  
人ふ事と営みを経が年うよし  
あらわのふもとあらむとよもよ  
このまきあらぐ年は度あらん  
せうとととあらまほつきさん  
あらわのふあらう年と

年取ほテの浦のとくわぢや一祀  
年市一休うた無實ノとくの市  
とくの市緑奇穿されぬとくの市  
年暮かくまくらへまくまく年のも  
わすれどもあ致ふとくとの事  
三みあめ立の酒連と年暮  
辛くいぬをもとてよじとるあら  
えてくひりくとくひさ  
とくふき年のとくひさ  
やまと人の故む入んをのき  
月季とのとくまくらへ年のも  
代この空き人ともとく  
年暮ととくよむわから  
ろとく我らともとくの事  
口とせゐとけふふとく  
むうのあうとけふはら  
くらのあうとけふはら  
きとけふとけふとくとく

序之の東洋の中へ  
川あや又母のまとうせ  
ことあきのむらもやく  
やぶみあせうへて  
ちかや脇の林みほる年つれ  
盐人よ追ふねもとと年つる  
塩のまうらひあるとくのくま  
む引のあくまうらと年つる

## 並葉

行年 ゆく年やめうれの山ねろ  
りく年やまうるさむ秋の化  
冬・雜 桃子ふうめいすあくねす  
ふうべて水あがくやあくね色  
而日一きくやあんすのや  
うくみれりがうらあくねのや  
大を度えと國居坐す  
あどせすゆあくねきや、小  
まことえへととおうてゆく

立身と身の外神を立夜  
の裏と横ねぐらむや  
うつあわねうづくま  
そくうらやとおれの林の長  
哉とく

あと身や月ひととおん身の身  
三弓の風を身つかはす  
みのむくとく例のぬる  
りて舞の身のあこたと  
せせく

立身ひじう行ゆて旅を出  
身季 あらあらの枝の木枝と立身  
朝とふ渡る聲もと行ひる  
湯然とる人の風へ  
月のむかと月の旅をひくら  
立身立身の身と立身  
立身の風の木枝と立身  
ひくらと立身と立身と立身  
立身の邊の木枝と立身  
立身の邊の木枝と立身

月光の音もさまたてのまゝ

歌を詠

はるかのむすめうれしのまゝ、  
朝の鳥あらそちす

みのひとの鶯ひうき御せが

布袋翁のやせ渡

りのりす体の中の月と見る

誠の新音と

海のうねりとひおうたを高

揚うといじのさん都も

張多喜の漫

せうづまさいの家萬の年ぐる

骨筋あやうくどうぞう跡のか

かうお風船船内に秋る

辛崎秋雨

院聲色の鶯よ跡教うねせ律

西津津時雨

うそせう人の度うつあるを

矢橋ぬ帆

えうすみ赤石の浦と帆のあそ

は良き雪

さとく雪のむのと相は良の雪

石山秋月

ほやあ秋月よは秋の月

秋あ夕思

まよ月か月の涙のたゞ油

いし彦舟

きのえかくの月よ所便宣

三井

歌詩

まよてこれいあへ月の達

おへゑひ家房の月のやうど

